連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部鹿毛敏夫教授の『唐人「ゑんはい」～豊後から伊勢神宮に参詣～』が掲載

●大分合同新聞　2018年1月27日(土)

大友時代を生きた人々

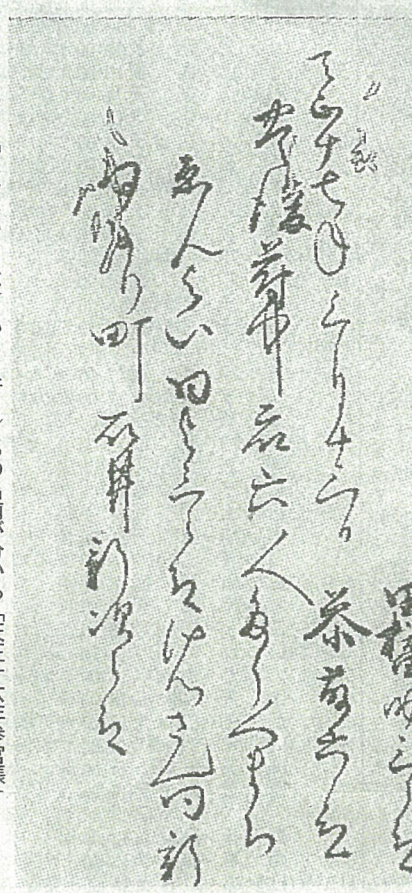
鹿毛　敏夫

唐人「ゑんはい」

豊後から伊勢神宮に参詣

「天正十六年参宮帳」と名付けられた面白い古文書があります。天正16～19（1588～91）年の豊後や肥後、日向から伊勢参詣した人物の名前を、神宮の御師（参拝者を案内し宿泊などの世話をする、現代でいうツアーコンダクター）の福島御塩焼大夫が記録した帳簿です。

この古文書は1964年刊の『大分県史料』第25巻に活字化されています。



唐人「ゑんはい」（後ろから2行目）らの名前が分かる「天正十六年参宮帳」

天正17年3月13日分の翻刻は「豊後符中衆六人たち　ゑんはい同与三郎殿　けんさん同新四郎殿　ゐなり町石井新次郎殿」となっています。

約430年前の3月13日に豊後符中（府内、現大分市）の町衆6人がお伊勢参りをしたことが分かるのです。ところが『大分県史料』の翻刻文では、6人のうち「ゑんはい同与三郎」「けんさん同新四郎」「石井新次郎」の3人の名前しか読み取れません。これはおかしいと思い、東京大学史料編纂所にある謄写本（古文書の書き写し）で確認したところ、原文では人名間に区切りがないことが分かりました。

そこでこの史料は、「たう人まち（唐人町）」の「ゑんはい　同与三郎殿」と「ゐなり町（稲荷町）」の「石井新次郎殿」と区切って解釈すべきです。それによると例えば刻は「豊後符中衆六人たう人まち　ゑんはい同与三郎殿　けんさん同新四郎殿　ゐなり町石井新次郎殿」となっています。

判断できます。同史料の全体的な記述特徴として、唐人は呼び捨て、日本人は「殿」を付す傾向があります。与三郎と新四郎の前の「同」は「たう人まち」を指して「日本人だけど唐人町に住んでいる与三郎と新四郎」という意味で「同」を付したと理解できます。ただ、これでも5人しかいなく1人足りません。

そこで今度は、この史料全体で「○○町◎人」の表記と人名数が一致しているかを確認したところ、確かに大半は一致しているのですが、この事例の他に2例、人数が合わない部分があることが分かりました。天正19年4月6日の参拝者「符中市之町しゆ（衆）五人」とあるのに記載人名は4人など、いずれも記載人名の方が少ないという共通点があります。

恐らく、実際に府内の町衆6人が伊勢詣でしたものの、うち1人は従者か子どもかで名前を書くに足らない人物だったため御師が記名を省略し、「ゑんはい」を筆頭とする主だった人物のみ記名したと考えられます。

「ゑんはい」や「けんさん（見山）」という九州在住の唐人（中国人）が伊勢参詣していたこと自体が面白いうえに、その唐人町に日本人も混住していたことも分かるのが、この参宮帳の特徴です。

（名古屋学院大学国際文化学部教授）